



住、道具、交通、通信、娯楽、教育、学校、芸術などの欲求を満すために案出されてきたものである。子どもが集団生活のための行動様式を学習するためには、彼らの欲求を満すために同様の過程を経るのである。この過程は、現代の学校のカリキュラムの組織化の際に強調される。このようなカリキュラムでは、相互に関連のある学習や行動は、人の経験領域とよばれる。カリキュラム単元という語は、子どもがその欲求をみだすに当って通るべき経験領域のことである。たとえば、航空学という経験領域は、飛行する機械に関するすべてのことをふくんでいる。飛行機は現代生活においてすべての年齢の人の興味をもつことである。ナースリースクールの幼児は玩具の飛行機に興味をもつ。そしてそれで遊びながら、理解を深めてゆく。2歳の子どもの経験は、飛行機を遊び、それをもって走りまわり、音をまねることである。それだけでも、2歳の幼児は、航空学の領域の中の一連の経験をしているのだと言ってよいのである。6〜7歳になると、子どもは模型飛行機をつくり、その名前を覚える。また空港の模型をつ

くる。彼らは飛行機をとばし、旅客を扱い、こうして作ったり遊んだりしながら、航空学の経験領域を広く深く探索するのである。それぞれの子どもの程度に深く広く正確にするかは、子どものレイタネスによる。そこにおける子どもの学習や行動がカリキュラム単元を構成する。したがってカリキュラム単元の内容は、幼稚園によって異なる。

子どもの要求に合わせて機会を与えること 実際には、子どもは身体的に、知的に、社会的に、情緒的に用意のできたときに行動することができ、そこで指導のためには次の諸点を留意せねばならない。(1) 子どもは一つの経験から他の経験へと自然に進んでゆくこと (2) その進歩は連続的であること (3) 子どもは準備のできたときにのみ、学習し行動するものであること (4) 各発達段階で、子どもの要求する行動型をとるものであること。そして子どもの指導に成功するためには、教師は次の諸点を考慮せねばならない。その年齢の子どもの特性 それぞれの子どもの特性 子どもが次第に理解を深めてゆくような経験の領域

以上の諸点を考慮した後には、教師は次の段階に進むことができる。

1、考えられる経験領域のリストを作ってみて、その子どもたちの成長に最も適当なものを選ぶこと。

2、その経験領域を通して子どもを指導するために、十分な準備をすること

3、その経験領域のある側面に子どもをふれさせること。

a、子どもがそれに関して何かをしたいという気持を起させるように環境をととのえる——実物、絵、書物、道具、その他の材料を通して。

b、子どもにその環境を探索させるようにしむける。その間に、子どもたちの興味のあるかを観察し、それを指導に利用する方法を考える。

c、子どもたちの話し合いを指導し、次に何をしたいかを見る。

4、その経験の中で要求されている行動のしかたを自分のものとするように、それぞれの子どもの能力に合った指導をする。それぞれの子どもが成功を経験するように助け

る。経験が連続するように考える。すぐ前の経験から出発して、次の経験にうつるように。

5、経験が進行するにつれて、その経過を記録しておく。――それは新しい材料を発見する上に、また子どもが要求を満しているかどうか評価する上にきわめて重要である。

6、各経験のしめくりとして、子どもたちの活動の結果を、親や友だちにみてもらうように助けること。

#### 発達の特徴を知ること

##### 5〜6歳児の特性

身体的 5〜6歳児は動きが大きく元気であり、その行動ははっきりした目標をもっている。たとえば、5歳児はつききをつむためにつむのではなく、船や飛行機をつくるためにつむ。

#### 社会・情緒

2、3人から8、9人の小さなグループで遊んだり仕事をしたりする。協力もするし、他人を排斥する能力もすすむ。

例 トニー 僕にも釣らせて

他の子 だめ

トニー 僕も釣りたいな、やらせて。

他の子 だめ

トニー 先生がやってもいいって言ったよ。

他の子 だめ、あっちにいけ、他の人は立入禁止だよ。

トニー (動かない、突然よい考えが浮かぶ) 僕お魚になるよ、そうして釣ってもいいよ。

ここではトニーがよい考えを出して、問題を解決している。しかし多くの子どもはまだこのような場合、先生の助けが必要である。

彼らは次第に他人の権利を認めることを学ぶようになる。

#### 知的側面

目標がはっきりしてくる。例えば木片を子どもが見る。考えが浮かび、目標がきまる。彼は飛行機をつくり家にもってかえる。おいていくように言ってもきかない。計画はほとんどしない。問題解決は、試行錯誤によってその場でやる。自分でつくることに熱心で、自己批判はない。

5、6歳児の発達特性は、重要な教育的意義をもっている。教師はクラスの環境をととのえるのに、次のような点に考慮せねばならない。

1、この年令の子どもに適切な経験領域は家庭と地域社会の生活の中に見出される。

2、子どもたちが相互に交るような環境をつくり、それが経験の中心になってゆくこと。

3、一つの興味は長期間つづかない。しかし同じ興味が何度もくりかえされる。

4、一つの領域の経験は、多くの小さな場面を發展させることによってなしとげられる。

5、形式はならないおはなしは、子どもの直接経験を見い出させるのに役立つ。近所への小さな見学はすばらしい基礎をつくる。

6、静かに坐って、一しよにきき、ともに話す能力が発達するとともに、社会的技術を使う機会を与えることができる。

7、ごっこ遊びの環境をつくることはとくに重要である。船、自動車、飛行機などを作ることはこの年令の子どもにもっともふさわしい。

8、問題をなくすために、予め計画することとは、6歳児では一般にむたである。

9、大きくて、どのようでも使える材料が適当である。

10、作るのに必要な道具、たやすく使えて

安全な道具が与えられねばならぬ。

#### 6と7歳児の特性

5と6歳児について言われたことは、すべてここでも通用する。次の諸点は相異点である。

身体 より細かい筋肉活動が発達する。そこから書く能力やより小さなものを作る能力と興味が出てくる。

社会・情緒 より多くの人数のグループができる。ほとんど1クラス全員でごっこ遊びをすることが可能である。敵や味方にわかれて対抗することがあらわれる。

知的側面 興味がより長く続くようになる。たとえば5歳児はつきみや箱で飛行機をつくることは毎日やって8日から10日くらいである。6歳児は、クラスの半分くらいが参加して、6週間くらいにわたってそれをつづけることができる。7歳児になると、クラス全員が参加して、飛行機をつくり、郵便を運ぶ、汽車やボートをつくり、郵便局をつくる。そしてそれは他の社会生活にも発展して一年間でもつづけることができる。7歳になると、あるプロジェクトを始める前に、子ど

もたちと計画することができる。

右のような発達特性から、教師はクラスの問題を整えるのに次のような点を考慮することが必要である。

1、この年令に適切な経験の領域は、現在の地域社会の生活である。また、他の土地との比較をすることもできる。

2、模型をつくる能力が発達するから、環境に対する理解を深め、探索の機会をつくる。

3、仕事の期間が長くなり、友だち同志とお互いに批判する態度が生れる。

4、クラス全員の興味が一つの大きな経験領域に集まることが可能になる。

5、経験がひろまり、また、深まる。

6、話し合いの中で、予め計画することが可能になる。子どもたちの目標に照して評価することができるようになる。

7、経験の中に、読む材料をとりいれることができる。必要な注意がきなどをたのしんで見る。

8、経験を記録する能力が発達する。書くことを導入することができる。

9、経験が終末に近づくとき、ある子ども

は、過去に起ったこと、将来に起ることに興味をもつ。

10、考えたことや感じたことを芸術に表現する能力がよりよく発達する。

11、人や物に同一化するが、それはごっこ遊びでやっているのだということを意識するようになる。

12、ごっこ遊びが主体となるが、現実社会で起っていることをもつととりいれてゆることができる。

#### 8歳児の特性

以前の年令の特性に加えて、次の点ほどくに強調される。

身体 この年令の子どもは頑丈であって、元気のよい遊びをする必要がある。

社会・情緒 所属するグループの範囲がひろがる。家庭の中の安定感はずでに確立し学校における友人関係の安定を求める。

知的側面 8歳児は好奇心に満ち、積極的である。事実を知りたがり、知識を求めて書物を見る。直接にふれる環境外のことにも興味をもつ。時間、空間的に離れたものに興味をもつ。大部分の子どもは考えたことを書

くことができ、必要なことを読むことができる。知識を系統的に整理することのできる時期である。

以上の点を考慮して、8歳児は次の点を留意することが必要である。

1、過去、現在にわたって、地域社会や他の土地の生活が適当な経験となる。

2、完成するのに長期間要する仕事が良い

3、手先が器用になるので、手先を使う仕事を中心になる経験領域が良い。たとえば、丸木舟をつくる。ねんどの壺をつくる。港の

模型をつくるなど。

4、共通の目標を意識し、同じグループに属する意識を強める。

5、より広い社会の一員としての自覚をもつようになる。

6、問題を解決することに満足を感じるようになる。

### 経験領域を選択すること

子どものために適切な経験領域の選択に当って、教師は重要な役割りを果たす。計画をするに当って、教師はカリキュラムのすべての面を心に留め、そのクラスの子どもの経験領域

の選択にいくつかの段階をへなければならぬ。その段階は次の通りである。

1、このグループの人種的、身体的、知的能力の構成を分析すること。

2、計画した経験を有効にするために、利用することのできる地域社会の資源を発見すること。

3、可能な経験領域をいくつか研究すること。そして、子どもたちが一つの経験から他の経験へともっとも自然に移ってゆけるような領域を選ぶこと。

4、次のような間に自分で考えてみるとたぬになる。

a、その領域の経験をするのに、子どもはそれだけの成熟をしているか。

b、その経験はどのくらい子どもの興味を刺激するか。

c、その経験は子どもの好奇心を満たすか。

d、その経験はごっこ遊びとなっているか。

e、その経験は材料をつかって作ったり、操作したりする機会となっているか。考えたことをお互いに話す機会となっているか。音楽や芸術やリズムの機会となっているか。

f、その経験は愛情や安定感や所属感の欲求を満たしているか。

g、その経験は学校の内外の子どもの以前の経験と関係があるか。

h、その経験の連続的学習の機会となっているか。社会的態度をひろめるのに役立っているか。

i、それは、もっとひろい範囲の研究に発展することのできるものであるか。

j、その経験は、子どもたちのいろいろな個人差をうけとめられるほど、豊富な内容をもったものであるか。

k、それはグループの民主的生活を促進させるか。それは小グループの協力に導くものであるか。

l、それは、自覚性と共に、他人の権利や福祉を考慮するようなものであるか。

m、主要な人間活動はその中にふくまれるか。すなわち、生活と健康の促進と保護、財産や自然資源の保護、原料の生産、商品の生産と消費、交通と物の交換、通信、娯楽、芸術的客観的表現。

n、材料や教材は得られやすいか。十分な

時期があるかなど実際の考慮を払ってるか  
幼児に適切な経験領域

5歳から9歳の子どもにどのような経験領域が適切であろうか。子どもの成長発達についての科学的な研究を、カリキュラム計画についての実験的研究から、次のような経験領域をおすすめすることができる。

5〜6歳児

・家庭

・地域社会

交通に関すること——汽車、船、飛行機、バスなどはとくによい。

家、店、郵便局、マーケット、公園、消

防署などは適当であろう

・農場

7歳児

・地域社会

テハート——どのようにして品物が作られ売られるか、他の国の品物、昔の品物など

ハン屋

郵便局、消防署

・地域社会全般

地域社会にはどんなものがあるか——各

種の建物、駅、貨物、交通機関

8歳児

船——浮ぶ船をつくる。港の活動、輸出輸

入、いろいろの国、いろいろの時代の船、

汽車と交通機関

鉄道の活動、貨物トラック——トラック

をつくる、積荷のこと

ハイウェイと安全について

インディアンの生活——その生活様式

経験の連続性

経験領域は子どもの発達にそくして連続的につくられねばならない。次にその一例をふ

す。

第一年（6歳児）

・家庭

原紙で大きな家をつくる、このことから出発して近所の家に興味をもつてであろう。

家を建てる人、建築材料に興味をもつ

材料、れんが、石など。

家具をつくる

皿をつくる——陶器をやくところを見学

するとよい。

家族の人の役割をとったおうちごっこ

家庭を訪れる人に興味をもつ——やおや

電気屋、牛乳屋、植木屋、郵便配達など

牛乳屋の車をつくる。

やおやのトラックをつくる

・地域社会

やおやの模型をつくる

菜園をつくる

母親のために昼食をつくる

農場見学

トラックをつくる

やおやをめくって、町をつくる（このへんで最初につくった原紙の大きな家はとりこわす）

道路、駅、鉄道などをつくる。

人形を使ったこっこ遊びをする。

人形をつくる

第二年（7歳児）

地域社会生活のつづき

銀行をつくり、お店やこっこに使う。

消防署をつくり、そこで何をしているかを調べる。

カソリンスタンドをつくる

公園、郵便局、劇場などをつくる。

飛行場をつくる

郵便を運ぶ船や飛行機に興味をもつ。

どのようにしてハンがつくられるか。

パンやさんをつくる。

製粉工場をつくる。

どこから穀物がくるか調べる―地図を

みる。パン製造の話を劇にする。

他の国ではどのようなパンをたべるか

調べる。

昔の人はどんなパンを食べたか調べる

### 第三年目（8歳児）

船の研究

どんな船があるか調べる。

港までの地図をつくる。

港を見学する。

船の用語のリストをつくる。

各人異った形の船をつくる。

船を作るのに計画を立て、設計図をつ

くる。

船についての詩や物語をたのしむ。

船の歌をうたう。

船の建造について読む。

浮ぶものと浮ばないものを調べる。

何故船が浮ぶかについての知識。

港の模型をつくる。

港の規則 船員の任務などを学ぶ。

航路の地図をつくる。

輸出するもの、輸入するものなどのリ

ストをつくる。

貝殻や海について興味をもつ

積荷を中心にして港の見学をする。

ゴム、綿などの品物に興味をもつ。

貨物船や荷物の上げ下しの機械をつ

くる。

ゴムについてもっと研究する

石油工業についてもっと研究する。

以上の紹介にみるように、この書物で

は、幼稚園と小学校一年生、二年生が一

しよに扱かれており、その間に密接な

連絡をつけようとしていることがうかが

われる。その連絡は、論理的な関連では

なくて、子どもの経験を関連づけようと

していることは注目すべきであろう。



（津守 真）

幼児の教育 第六十二巻 第八号

八月号 © 定価六〇円

昭和三十八年七月二十五日 印刷

昭和三十八年八月 一日 発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

編集兼 津守 真  
発行者

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売  
所フレーベル館にお願いたします。